

# 授業の発展として本を読む

金本 宣保

1994年の4年生（高校一年生）の国語Ⅰ現代文の授業の発展として、授業で教材としてとりあげた著者の本を読む授業をした。本を読んだのは5年生になってである。読んだ本について紹介文を書き、読み合っ、現代の文章の課題としていることを広く理解することをねらいとした。生徒が問題意識を深めることは、文章を面白く読むための条件である。それは、読書生活、広くいえば情報を受けとめ発していく生き方につながっていくものであろう。その一つの段階として教科書以外の本を読む学習は、有効である。

## 1 4年生の「国語Ⅰ 現代文」の授業

1994年度の高校入学生から新教育課程となり、国語の授業時間はそれまで4、5、6年（高1、2、3年）それぞれ5時間、計15時間を必修としていたのが、4年で1時間減となった。4年では、現代文2時間、古典（古文、漢文）2時間で授業をすることにした。ここでは、現代文の授業で、中心となる精読した教材とその発展、あるいは精読するための補助とした文章とを示す。

	中心の教材		発展・補助の教材
1 学期	「言葉の力」	大岡 信	「言葉の力」の教科書で省略した部分
	「羅生門」	芥川 竜之介	芥川竜之介「藪の中」（朗読テープ） 三好行雄「芥川竜之介論」の「無明の闇『羅生門』 の世界」の一節
	「手作り幻想」	川田 順造	（教育実習生の授業）
	「水の東西」	山崎 正和	
	「ボート」	黒井 千次	
2 学期	「城の崎にて」	志賀 直哉	志賀直哉「清丘衛と瓢箪」「児を盗む話」「剃刃」
	「世界の中の日本語」	梅棹 忠夫	（教育実習生の授業）
	「日本の知識人」	大江 健三郎	（教科書外から 部分）
	「日本文化の雑種性」	加藤 周一	（教科書外から） 加藤周一「夕陽妄語Ⅳ」から
3 学期	「見る－考える」	大森 荘蔵	大森 荘蔵「真実の百面相」
	「日常性の壁」	安部 公房	安部 公房「枯尾花の時代」
	教科書 「精選 新国語Ⅰ 現代文篇」	明治書院	

授業は、ABC 3組を金本が、DE 2組を金子直樹教諭が担当し、二人で相談しながら進めていった。大きな計画案は立てていたが、実際の授業は、進行の中で教室の様子を見、判断して何を教材とするか決定していった。読みを広げ、筆者の課題意識を理解し、生徒が現代を生きるために問題を明らかにするという形で文章を読んでいく態度を養いたいと考えた。

## 2 発展として本を読む。

(1) 予告4年生の終わりに配布したプリント

4年生国語（現代文） 参考図書リスト

I 4年生で学習した評論文から、関連、発展した内容のもの

大岡 信	『詩・ことば・人間』	講談社学術文庫	800円
〃	『新編 折々のうた』	朝日新聞社	780円
川田順造	『サバンナの博物誌』	ちくま文庫	品切
山崎正和	『柔らかい個人主義の誕生』	中公文庫	500円
加藤周一	『雑種文化』	講談社文庫	420円
梅棹忠夫	『文明の生態史観』	中公文庫	500円
大森荘蔵	『知の構築とその呪縛』	ちくま学芸文庫	900円
安部公房	『内なる辺境』	中公文庫	320円
〃	『砂漠の思想』	講談社文芸文庫	1300円
中村雄二郎	『哲学の現在』	岩波新書	620円
大江健三郎	『あいまいな日本の私』	岩波新書	620円

II 文学関係の評論・概説書

桑原武夫	『文学入門』	岩波新書	620円
西郷信綱他	『日本文学の古典』	岩波新書	620円
阿部 昭	『短編小説礼賛』	岩波新書	品切（5月重版）

※なるべく手に入りやすく読みやすいものを中心にリストアップしましたが、品切れのものについては、図書館などをあたってみなさい。

※春休みに読めるものは読んでおきなさい。なお、5年生になって、1学期の教科の課題として、このリストの中から一冊選んで、紹介文を書いてもらいます。

(2) 5年生の1学期の学習から

参考図書リストにある本を購入し各自で読む。 (教室で注文をとって購入させた。)

紹介文の例を読む 《1時間》

(3) 自分で選んだ本について、グループで話し合う。 《1時間》

(読んだ本が同じものでグループをつくり、同じ本を読んだ者が多い場合はグループを2～3に分けた。)

(4) 自分で選んだ本について、紹介文を書く。400字程度 《1時間》

生徒の選んだ本 5年C組の例

「あいまいな日本の私」	11	「柔らかい個人主義の誕生」	4
「内なる辺境」	10	「新編 折々のうた」	3
「雑種文化」	7	「知の構築とその呪縛」	1
「文明の生態史観」	7	「短編小説礼賛」	1

(5) 紹介文を冊子にして回覧する。

(6) 紹介文を教室で発表する。 《1時間》

(3)の授業のグループのまとめの例 以下生徒の作文は5年C組から。(引用文の下線は金本。)

A. 大江健三郎「あいまいな日本の私」その中の「井伏さんの祈りとリアリズム」

○私にとってこれをよむと井伏さんはいい作家に思えた。

○彼が井伏鱒二という人間の全てを尊敬しているように思える。

○大江健三郎はとても実直な人だろうと思う。

○大江さんは、井伏さんを尊敬していることがわかった。

#### B. 安部公房「内なる辺境」

○制服についての考え方が複雑ですばらしいと思った。

○キーワードは「ユダヤ」であると私は推測しました。

○どうして、正統であったパラントロプスが滅び、異端であるアウストラロピニクスが生き残ったのか不思議だ。

#### C. 加藤周一「雑種文化」

○おもしろくなかった。

○筆者の「小さな希望」がよく伝わってきた。

○雑種性を肯定した新しい視点が感じられた。

○日本の文化と西洋文化との比較の例が面白かった。

○現代の日本を肯定的に見る目が見えた。

○歴史的背景を通じての雑種性が少し感じられた。

○国際社会の中での日本の立場をあらたに認識できたと思う。

#### D. 梅棹忠夫「文明の生態史観」

○なかなかけっこう読み易い評論だ。あまり感心するところがないと思った。

○内容が区切ってあり、それぞれテーマがついていたが、分かりにくい所が多かった。

○あまりよく読んでいないが、インドを肯定的にとらえ、日本を否定的にとらえすぎているのではないかと思った。

○アジアの一地域に住みながらあまりよくアジアを知らないと思った。

○とても難しい。“西洋”と“東洋”と“中洋”とに世界を分ける考えにはなるほどと思った。

#### E. 山崎正和「柔らかな個人主義の誕生」

○時代を的確にとらえている。これを参考に90年代を考えてみたい。

○しつこく、60年代と70年代という風に時代を比較し、消費というものに関連づけている。

○時代の流れを冷静に見極め、その時代における個人またはそれをとりまく変化をうまく書いている。

○まだほんの少ししか読んでいないが、変化が著しい時代とそうでない時代があるというのは面白いなと思った。

(4) の紹介文の例

#### F. 「あいまいな日本の私」

「私たちは、井伏さんがお書きになった50年前の歴史を覚えている必要がある。むしろ私たちがそれを覚えることを励ますように、もっといい形で井伏さんは原爆後の人間生活を書いてくださった。(略) こういう偉大な作家を記憶し続けたいと私は考えています。」(「井伏さんの祈りとリアリズム」から)

私は、この部分、というかこの章を読んで、最初はショックだった。彼ら（大江さんと井伏さん）は、「忘却はいけない」と、「悲しみ、苦痛のうちに生命（希望）があるのだ」といつている。しかも、章の題は「井伏さんの祈り」とある。私は今まで、“忘却は罪ではなく、悲しみを忘れることができるから人間は生きていけるのだ”と思いつけてきた。“悲しみ”から生まれるのは“悲しみ”だけだと思いつていた。

私は逃げることを許す考え方だった。だのに彼らは、逃げずに立ち向かえ！という。それを“祈り”としてまで。先に、“悲しみを忘れることができる・・・”と書いたが、本当にそうだろうか。私は、“考えること”や“苦しさに立ち向かう”のが怖かっただけではないだろうか。・・・きっとそうに違いないとこの章は私に思わせてくれた。

#### G. 「あいまいな日本の私」

かなり難解な文章である。全ての話が講演から取られているだけあつて、使っている言葉は簡単だし、その箇所その箇所での意味は分かりやすい。しかし、その話全部で筆者が何を言おうとしているのかはよく分からない。これは、満足のゆくまで書き直すという筆者だから、思考の構造が高いレベルのものになっているのだろう。何度も読めば、「(略) 私は自己批判を込めていつています。『ヒロシマノート』という本はエモーショナルに書かれている。(略) しかしそれにはやはりいくつも問題があつたと思うのです。そうじゃなくて、冷静に、沈着に、穏やかに、時にはユーモアをこめて、事実だけを正確に伝えることが必要だつた。(略) そして、それをしたのが井伏鱒二さんだつた。」というように、文章の端々に自分と他の人を比較して、その人の影響を受け、その上で小説家としての自分は何ができるのかということを考えている大江さんの実直な姿が見えてくるように思う。

#### H. 「内なる辺境」

「正統と異端に分けるとすれば、亡び去つたパラントロプスこそ、原始類人猿からの正統な子孫であり、わが祖先のアウストラロピテクスは、あいにく同胞の知らぬ生肉の味をおぼえてしまつた、非道の異端であつたというわけだ。」29P 「異端のパスポート」より

この引用文は、とても興味を引く文であろう。文の論理からいけば生きのこるのが正統のパラントロプスであり滅び去るのが異端のアウストラロピテクスのはずなのに逆転しているのだ。人間は異端であるから野蛮で下等であると言いつ、ゴリラ的容貌であるパラントロプスが柔和で気品に満ちているのであると言いつ。しかしなぜ正統が滅んだかは正統というのはあまりにも保守的な社会であるから滅び移動本能をもつた異端こそが現在の人間に至っている。このように安部氏は正統を批判していると思うのだが、保守的であることがどうして滅亡につながつたか知りたい。

#### I. 「雑種文化」

「高みの見物は正確な判断をあたえるが、その判断は役には立たぬ。」「役にたたぬことそのことが判断の正確さの条件になっている。」「黒人の詩人はアメリカの黒人の社会に生きていなければならぬ。たとえばそこで言論の自由が制限されていつても、そこでいつことは、もっと言論の自由のあるパリから呼びかけるどんなことばよりも、重みがあると彼はいつた。」

この文は、第二章「高みの見物について」から引用したものであるが、僕に強い感銘を起こさ

せるのに十分であった。いやまったく目からウロコがおちた、というのはこのことを言うのであろう。蓋し、加藤氏は相対主義者なのだろうが、論の展開が見事であった。論の要旨は右の引用に端的に示されているのだが、このテーゼは、僕に新たな好奇心を喚起してくれた。「これをアウフヘーベンすることはできるのか」というそれである。今後じっくり考えていきたい。

#### J. 「文明の生態史観」

「東洋・西洋のほかに、中洋をかんじょうにいれなければいけないのだ。中洋は、ひろく、おおきい。東洋から西洋にむかう途中、われわれは、ほとんどまる一日のあいだ、中洋諸国の上空をとばなければならないのである。それはなにも、不毛なる精神の砂漠の横断ではないのである」  
(59P 東と西の間－V中洋－中洋)

かつて私は、文化史を主題として書かれた文章で、日本文化の対照とされたのが西洋またはヨーロッパ的世界でない、すなわち東洋と西洋の対比でないものを読んだことがない。そして今、初めて読んでいるのがこの書である。しかし、この書は昭和31年に発表されたという。今でさえこんなに新鮮な感じを受けるのだから、当時、文化史に革命的なものをもたらしたのは明らかだ。内容を言うと、著者の言う中洋の人類学に重点をおいた、文化史と日本との対比でインドの様子とともに、日本の文化のあり様を描いている。

あたり前だが、新しい視点や感じ方が大切だと思わされた。

#### K. 「柔らかな個人主義の誕生」

「われわれが予兆を見つつある変化は、ひと言でいへば、より柔らかで、小規模な単位からなる組織の擡頭であり、いひかへれば、抽象的な組織のシステムよりも、個人の顔の見える人間関係が重視される社会の到来である。」(105P 新しい社交空間)

山崎氏の意見によって、僕たちは、現在自分たちが生活している時代をはっきりと位置づけることができる。例えば現代は、自らの欲求について自由であるがゆえに不安を持ち、自己の欲求の方向や限度の適切さに自信を失っている時代である。しかし、その不安は、「個人の顔の見える人間関係」によって解消されるものでもある。言われてみるとわかることだが、自分自身で自分の生活している時代を知るのは非常に難しいと思う。しかし、この本に出会えば、少しでも自分の生きている時代を理解することが可能になると思う。

#### L. 「短編小説礼讃」－阿部昭－

私が今まで長編小説より短編小説の方が好きだったのは単に「短いので読みやすい」という理由だけだった。確かにこの理由も当てはまるが、「結び」の部分にあるように、短編小説は「短いとはいえ、それらはゆうに登場人物の『人生』をおおうに足りる長さ」であるということも魅力の一つである、と思った。

この本はただ多くの短編小説の題を並べたりするのではなく、それが完成、出版に至るまでの創作の秘密などにも及んでいて、今まで読んだことのあるものでも、これを読んだ後もう一度読み返すと、また違った視点から読めて、短編小説をもっと深く味わえるのではないか、と思う。

#### 考察

筆者は授業で学習で知っているが、文章は、生徒にとってはじめてのものであり、教科書の教材

より長いものであるから、生徒のとりあげた内容は多様である。それが、それぞれ、生徒に自分の問題として受けとめられている。

大江健三郎の本が多くの子供にとりあげられているのは、ちょうど彼がノーベル賞を受賞したことによる。また、福山での講演「井伏鱒二の祈りとリアリズム」がはいっていることを授業者が紹介したこともある。しかし、一つの文章から個々の生徒が受けとめるものは、それぞれ別々である。Fは、内容の中心をそのまま共感し、心情をこめた文章で紹介している。Gは、その文体から、大江健三郎の思考をさぐり、彼の「姿」を思い描いている。

「内なる辺境」が多くの子供に選ばれたのは、その本が安価であったからであろう。それだけ本はうすい。内容も易しいので、短いからと選んだ生徒にも読みやすかった。

「雑種文化」「文明の生態史観」「柔らかな個人主義の誕生」は、それぞれ、子供にとっては新鮮なもので、ものごとをとらえる視点を教え、今日の課題として理解されている。

「短編小説礼讃」を選んだのは一人であったが、自分の好みの意味を教えられている。

### 3 「井伏鱒二」の作品を読み、紹介文を書く

5年生（高校2年生）2学期の授業で、「井伏鱒二」の作品を読み、紹介文を書く授業をした。それは、大江健三郎「あいまいな日本の私」の中の「井伏さんの祈りとリアリズム」の紹介文を導入として始めた。その授業の展開は以下の通りである。

(1) 井伏鱒二の作品を読む。－作品とその扱い方－

①「屋根の上のサワン」 全文を朗読テープで聴く。

②「山椒魚」 全文をプリントで読み、朗読テープで聴く。

《第1時》

③「さざなみ軍記」(抄) 指導者が大筋の紹介をする。

－用意した本文のプリント－

・冒頭 寿永2年7月15日、16日（戦いの始まり）

・同 7月25日、26日、27日（帝都からの出発）

・同 8月19日、同じ日の夜、次の日（梨の木の家の少女との出会いと別れ）

・同 9月27日、28日（小太郎と覚丹の活躍、「私」の将としての成長）《第2時》

④「黒い雨」(抄) 指導者が大筋の紹介をする。

－用意した本文のプリント－

・矢須子の日記（黒い雨をうけた時のこと）

・閑間重松の日記8月6日（原爆をうけた時、子供と兄との出会い、「ムクリコクリの雲」）

・同 8月15日（鰻の子、敗戦の放送）

・結び（「五彩の虹」、重松の願い）

《第3時》

(2) 井伏鱒二を紹介する作文を書く

①課題 「井伏鱒二を紹介する手紙を書く」を提示し、

大江健三郎の講演テープ「井伏さんの祈り、私の祈り」の後半を聴く。

《第4時》

②作文を書く。

※日本以外の国にいる同世代の者への手紙の形で書かせる。

※生徒への注意事項

1 本文のみとし、前文などは必要としない。

2 井伏鱒二の作品を引用する。

3 自分のことを書けるならば書く。

《第5時》

③ 作文を発表する。

《第6時》

作文の例 M. (Fを書いた生徒)

井伏鱒二という作家を御存知ですか。「黒い雨」という作品を読んだことがありますか。私は、日本の高校生ですが、高校2年生になって初めて彼の作品を読みました。

彼の作品の中で、最も心を打たれたものとして、私は「黒い雨」を挙げます。「黒い雨」という作品は、第二次世界大戦の終わり頃にあなた方の国が我が国に落とした、“原爆”について、いえ、その“原爆によって傷ついた人たち”について書かれています。題である「黒い雨」が何を示すかわかりますか。原爆の後、身も心も傷ついて、ぐちゃぐちゃになった人々に降り注いだ“悪魔の雨”のことです。

この井伏鱒二の「黒い雨」以外にも、原爆について書かれた本はたくさんあります。しかし、ノーベル賞作家、大江健三郎曰く、井伏鱒二の「黒い雨」はそれら全ての原点であり、かつ頂点に位置する作品なのです。

何を誇張するわけでもなく、「黒い雨」は原爆を語ります。その中には、アメリカに対する憎しみとか恨みは書かれていません。ただ、ひたすら祈るのです。治る見込のない原爆病に犯された姪のために・・・。それがどんなにつらいかわかりますか。死んでいく姪のために、“濁った灰色の空に、五彩の虹が出たら、彼女の病気は治るのだ”と願をかける一人の男の背中がいかに寂しいか、想像がつかますか。私は戦後生まれですし、原爆そのものの体験や、何かは全くありません。それは、あなた方とて同じでしょう。しかし、“知らないからわからない”そんな状態のままできていいわけがありません。

どうか、井伏鱒二の「黒い雨」を読んで下さい。そして、「原爆」を知って下さい。

N. (Gを書いた生徒)

僕たちの町から出た作家に、井伏鱒二という人がいます。そして、彼の代表的な作品のなかに、「さざなみ軍記」という話があります。この話は、700年程前の時代のサムライ同士の戦いで敗れた側の少年が書いた逃亡記という形で書かれています。この少年というのは、僕たちと同じ年代なのですが、この時代では既に成人であると認められていて、部下もいて何でも自分で判断していかなければなりません。逃亡の初めのほうでは何も分からなかった少年が精神的に成長していく物語でもあるでしょう。ある時、少年は指令により、民家に火をかけて殺戮を行わなければならないようになります。その時の少年の思いは、「私たちが残忍に殺戮を行えば行うほど、私たちは無力な民家に反感をもたれ、私たちの部下は脱走できなくなる。しかし私は脱走したい。誰よりも先に味方から逃れていきたい。」というものでした。これはやはり、軍隊という異常な集団から抜け出し、普通の少年として暮らしたいという思いがあるように思います。この物語は、感情を殺したような淡々とした口調で語られていきますが、所々で16歳の少年としての気持ちが見える部

分もあり、とてもおもしろいと思います。軍隊の中で早急な成長を迫られた少年の外面と内面が分かります。是非一度読んでみてください。

O. 井伏鱒二という作家がいました。私も授業で読むまで井伏さんの作品に触れたことはなかったので、御存知ないかも知れません。作品に「山椒魚」というのがあります。私はすごく気に入っています。まるで自分が水底にいて、山椒魚を見ているかのような臨場感。これはやはりていねいな観察のたまものでしょう。谷川に足を運び、石を裏返したり、水をすくったりしなければわからない「感覚」というものがありますから。

山椒魚が話した言葉は、というか山椒魚の言動すべて、私たちのボヤキのように聞こえてはきませんか。井伏さんは山椒魚を擬人化することで、実は人間を擬山椒魚化している。落胆、後悔、絶望。自分で自分を追い詰め、袋小路に入っていくものですよ、人間というのは。そして何かの働きかけがあって浮上していく。この作品では、カエルがその役割を果たしています。カエルとの悪口の応酬が欲求不満の解消につながっています。

「さらに1年の月日がすぎた。2個の鉈物はふたたび2個の生物に変化した。けれどかれらは、今年の夏はお互いに黙り込んで、そしておたがいに自分の嘆息が相手に聞こえないように注意していたのである。」

これで終わっていった、「ついに2個の鉈物はそのまま動かなくなった。」とかいう結末になったら、救いようがないですよ。私は井伏さんの書かれた結末がすごく好きです。私たちは救われていると思います。そういう救いを与えてくれるのが井伏鱒二だと思うのです。

それでは最後に、山椒魚の結末を引用しますね。

「よほどしばらくしてから山椒魚はたずねた。

『おまえはいま、どういうことを考えているようなのだろうか?』

相手はきわめて遠慮がちに答えた。

『いまでもべつにお前のことをおこっちはいないんだ。』

#### 考察

Mは、Fをそのまま発展させて、より具体的に書いている。Nは、Gと全く別に大江健三郎のとりあげなかった作品について書いていた。井伏鱒二の作品の登場人物の中に、自分と重なる人物を見い出している。ここで、大江健三郎の文章が、彼のとらえた井伏鱒二であることを理解したはずだ。大江健三郎の文章の外に、井伏鱒二はあるということを具体的に認識する、それは、大江健三郎の価値を低めることではない、そういうことが分かることは大事なことだ。

Oの文章は、実は、教室で教材とした文章とは違う本文で紹介文を書いているのだが、教室では1985年に改稿され本文を教材とした、そのことについてはここでは触れない。大事なことは、Oが書いている、「井伏さんは山椒魚を擬人化することで、実は人間を擬山椒魚化している」という読み方は、素朴なものではないことだ。評論文で、様々なものを読み、そういうものの救うことのできないものがあるという感覚が、山椒魚に人間を感じさせているのだ。「谷川に足を運び、石を裏返したり、水をすくったりしなければわからない『感覚』」にしても、「教養」がとり払われる所に感ずる清々しさであるといえよう。近代の評論文の世界を理解することで、近代の小説を味わうことができるのである。